

BOOK REVIEW

「環境保全と持続的農業」

嘉田 良平 著

現在世界的に環境問題がクローズアップされ、農業においても、その問題が重要性を増してきている。中でもヨーロッパやアメリカでは、農業の環境への負荷が問題とされ、環境保全型・粗放型農業という新たな農法への転換が模索され、大きなうねりを形成していることが最近の多くの研究によって明らかにされている。

それに対し、日本農業では、環境保全の視点が変革の基軸にまではまだなっていないのが現状である。それは、昨年六月に発表された農水省の「新政策」でも環境保全型農業の確立が宣言されはしたが、市場メカニズムの更なる推進による新経営体の形成や価格引き下げといった従来の構造政策の延長路線の性格が強く、その実現

が疑問視されるような状況にあるからである。

さて本書の発行は一九九〇年であり、農業における環境問題研究の重要性をいち早く指摘した草分け的な位置付けをもつ。

本書の内容をざっと整理すると、まず地球環境問題への対応の中で世界の食糧生産の将来に暗雲がかかっていること、またアメリカ・カナダ等の食糧輸出国での穀物生産の不安定性が日本にとって要注意であることが示され（第一章）、次いで日本の食糧輸入自由化の歩みや米輸入自由化問題をめぐる争点を見たうえで、水田農業の粗放化対応が必要なが主張され（第二章）、ガット・ウルグアイラウンドでのアメリカの狙い、日本の食糧安全保障の問題点

が指摘されている（第三章）。さらにECでの粗放農業への模索や、アメリカでの八〇年代農業不況、農村の過疎化現象、九〇年農業法による持続的農業への取り組みなどが記述され（第四章・第五章）。

これらの二つの章をまとめる形で欧米における持続的農業の中身と背景と将来展望が述べられている（第六章）。そして最後に、環境保全が世界のキーワードとなる中で、多農産・多肥料型の日本の水田農業も、「額縁休耕」等によって粗放型の水田農業に導くべきことが結論として説かれている（第七章）。

こうして本書は、先進国において環境保全型の持続的農業の確立が基本的方向となりつつあることを確認し、日本農業もこの方向をめざす努力と準備をすべきことを説いたものである。

さて本書を読んで私が印象的だった点の一つは、上述のように、先進国において低投入型農業への農法転換によって世界の食糧生産の不安要因がますます増加すること、したがって最も注意を要する

のは食糧輸入大国の日本であり、従来の輸入構造の転換の必要性が迫られていること（第一章）である。そして、このことはその後ますます強まっているように思われる。

第二は、ガット農業交渉はそもそも環境への視点が欠如していること、したがってガットルールでは地球環境保全が困難であるため、新たなルールづくりに率先して取り組むことが食糧・資源輸入大国日本の責務であること（同）である。

ところが、こうして筆者によって投げかけられた問題提起は、その後も残念ながら、ウルグアイラウンドにおいても、「新政策」においても改善の方向は見せていない。その意味でも、本書の問題提起は今日ますます重要性を帯びてきていると思われる。

（家の光協会発行、一九九〇年十一月刊、定価一、三〇〇円）
評者

市立名寄短期大学

助教 小林 恒夫